

優秀作品

「お母さんを乳がんで亡くして」

小澤 摩希子（こざわ・まきこ）

27歳／会社員／東京都

母は、長い闘病生活を経て、私が大学1年生になったときに他界した。

やっと手がかからなくなったという安堵からであろうか、ゆっくり眠るように亡くなったそう。最後の最後まで母は母らしく、弱いところを見せまいと、私たち兄弟には最期のときを知らせないでと周囲に頼んだそうだ。

そんな母が亡くなる数ヶ月前、私は自分の乳房にしこりを発見した。しかし、家族には言えないままだった。そして、保険証を使用した記録が残らないように病院に行くことさえ避けた。私の想いはただ1つだった。「常に私たちを第一優先にしてくれていた母が、自分と同じ病気になったと知ったら、どう思うだろう。きっと悲しむに違いない。自分を責めるに違いない。」そう感じた。だから、ひたすら隠し続けた。

母が亡くなってからも病院には行けなかった私の背中を押すような出来事があった。母の遺品を整理していると、1冊のノートが出てきた。そこには、一度も私たちの前で弱音を吐いたことがない母の素直な気持ちが綴られていた。

「やっぱり私も癌になった。祖父もおじさんも癌で亡くしてきたので、いつかなると思っていたが、まさか私も癌になるとは。怖い。とても怖い。」

というような内容が記されていた。そして、いつかなると思っていながらも検診を受けなってきた母の切なる想いもそのときに感じ取れた。母は、私をだっこしたときに乳がんを見つけたが、もし先に検診で見つけていたら…という気持ちを一緒に生活してきたなかで、感じ取ることが度々あったからだ。

母は小学2年生の私にこう言ったことがある。片方の乳房を切り取った母が、びっくりしないでと言いながら、お風呂で初めて新しい母の姿を私に見せ、「いつかあなたもなるかもしれない。自分で日々気をつけること。異常を感じたらすぐに病院に行くこと。」

私はそして、決心をした。勇気を出して乳腺外科で検診を受けることにした。周りは年配の方が多かったので、どのように見られているか気にしつつも、どうか乳がんではありませぬように…と願いながらじっと待合室で耐えた。幸いなことに私の腫瘍は、良性であった。母に心から感謝した。そして、母の苦しみを少し分かった気になった。

それからというもの私は、定期的に検診を受けている。確かにマンモグラフィは乳房を挟むとき、とても痛い。でも、一生苦しむより、一瞬苦しむ道を私はこれからも選ぶ。母の想いを胸に抱えて…。